

第1回コンパクトなまちづくり専門小委員会 議事概要

日 時	平成 27 年 7 月 31 日（金） 13 時 00 分～14 時 40 分		
場 所	北九州市役所 5 階 プレゼンルーム		
出席者		氏 名	役 職 名
	委 員	寺町 賢一	九州工業大学大学院 工学研究院 建設社会工学研究系 准教授
	委 員	中村 雄美子	NPO 法人北九州市子育て・親育ちエンパワメントセンターBee 代表理事
	委 員	◎柳井 雅人	北九州市立大学 経済学部 教授
	臨時委員	泉 優佳理	元北九州ミズ 21 委員会（第 8 期）委員
	臨時委員	木内 望	国土交通省 国土技術政策総合研究所 都市研究部 都市計画研究室長
	臨時委員	志賀 勉	九州大学大学院 人間環境学研究院 都市・建築学部門計画環境系 准教授
	臨時委員	白木 裕子	（公財）福岡県介護支援専門員協会 常任理事
	臨時委員	谷口 守	筑波大学 システム情報系 社会工学域 教授
	事 務 局	建築都市局（都市計画課）	
議事内容	<p>1 開 会</p> <p>（1）開 会</p> <p>（2）建築都市局長挨拶</p> <p>2 委員紹介</p> <p>3 副委員長選任</p> <p>4 議事</p> <p>（1）北九州市の都市の現状等</p> <p>（2）都市構造上の課題とまちづくりの方向性</p> <p>（3）今後のスケジュールについて</p> <p>5 閉会</p>		

◎：委員長

第1回コンパクトなまちづくり専門小委員会の主な意見

1. 公共交通の利便性、持続可能性

- 交通事業者にとっては、ニーズのある路線等が今後の基幹ネットワークと位置づけられても問題ないが、一方で利用者が減る支線、ローカルラインを基幹ネットワークに位置づけられると困ると思う。
- 公共施設の集約と公共交通の確保は、相乗効果が得られるよう併せて考えていくことが必要。

2. 生活サービス施設の利便性、持続可能性

- 若い世帯は、教育環境が良いこと、土地が安いことから、郊外部に住んでいると思う。コンパクトなまちづくりでは、どうしたら若い子育て世帯が中心部を選ぶのか考えることが大切。その際、複数の関連部局が連携しながら考えていくことが必要。
- 人口が増加している地域では、良好な教育環境などが人を引き寄せているという側面がある。生活サービス施設の立地・整備は、単なる建物の配置としてではなく、人を引き寄せるシステムとして考えるべき。
- 居住を誘導するうえで経済面、生活面、教育面などどこにバリアがあるかを明確にしながら、検討する必要がある。また、これを市内全域にわたってするのは困難なので、問題が集約されている地域にピンポイントで着目するのが良いのではないかと。
- 公共施設は、その利用圏に応じ、広域圏向け、ある程度の地域圏向け、近隣圏向けに区分けして集約を検討し、また、そのいずれもが公共交通網の近い所に立地させるというのが大事。

3. 高齢者の福祉、健康

- 高齢者の場合、持ち家に住む人が多いので、借家住まいの人のように簡単には住み替えはできない。
- 高齢者がかなり点在しており、一人一人の家に介護サービスを提供するには、介護人材のマンパワーが不足している状況。これから高齢者が増大していく中で、円滑に訪問介護サービスを提供するためには、インセンティブや住み替えのハードルを低くする施策などによる高齢者の居住の集約をぜひ考えていくべき。

○地域包括ケアシステムでは、老齢期になってきて介護が必要になる初期の段階から早めに住み替え、自分たちがどのような老後を過ごしたいかイメージしてもらっている。最近の高齢者は、早めの住み替えをしないといけないという意識は出てきていると思う。

4. 斜面地の安全性、利便性

○八幡東区の斜面地は、平地、急峻な中腹、少しなだらかな山手の各部分に分かれる。このうち中腹地域の高齢化や人口減少、空き家率の増加が進んでいる。

○居住条件の悪い地域は、自ずと人が減り、自然の推移に任せても再編が起きていく。それを、加速させようとする場合にどういう手段があるか考えるべき。一方で、高齢者の居住不安を招かないようにすることが必要。

○北九州市の平地は、商業系の用途地域が多く、斜面地から平地に居住を誘導した場合には、用途地域の変更の検討なども行い、住環境として良好なものになるのか考える必要がある。

5. 財政の健全性

○都市のコンパクト化の結果が公共施設の重点投資になり、公共施設 20%削減という基本的な考え方とは逆に、公共施設を削減できなかったということにならないようにすべき。

○都市経営のコストに関しては、「誘導施策」を講じるよりも、ドイツなどで行っている減築など最初から密度を下げるといった計画的な「公共事業」を進めるほうが、トータルで見るとコストがかからない場合もある。

6. 将来都市構造の設定

○居住を誘導するには、拠点ごとに特徴を持たせることが重要。これまでのイメージと全く違った特徴が見つかる可能性があるため、拠点の特徴を精査する必要がある。

○北九州市は、実際に住んでみると非常に子育てしやすいと言われる方が多いので、拠点の設定にあたっては、北九州の特徴として、ここを極める戦略が考えられるのではないかと。

○将来都市構造のイメージ図では 17 も拠点があり、これはコンパクト化計画ではなくて分散化計画ではないかと指摘されると考えられる。

- 拠点をたくさん設定するのは悪くないが、設定するのであれば、拠点間の公共交通の利便性を圧倒的に便利にするなどみんなが街なかに出られるような施策を講じながら、本気で設定すべき。
- 北九州市は、地形上交通軸がはっきりしており、また、5つの市が合併され、それぞれの拠点の性格が全然違うことが他都市との違いであり特徴。交通軸も設定しやすい都市構造である。デメリットと捉えられていたものも、今般立地適正化計画を考えるときにはプラスになると捉え、この特徴を活かすべき。

7. 計画策定上の留意点

- 立地適正化計画は、住民が、どういう問題が自分たちのところで起こり得るのかなど、例えば場所をクローズアップして、生活を立体的に捉えること等により検討を進め、市民が読んで説得力のあるものとすべき。
- 計画策定にあたっては、市民は自分の生活環境が変わるかもしれないという不安を抱えることになるので、パブコメ等で聞くだけではなく、どう分かりやすく説明していくかという観点も大事。
- コンパクトシティ政策は、自治体トップの多少の反対を押し切ってでもやりきるという姿勢があると進めやすい。